論　文

公共論的転回の問題構成

― コミュニケーションとメディアをめぐって ―

権　安　理*

はじめに

公共的であることは，どのような意味をもつのか。本論は，ハンナ・アーレントの公共空間論とユルゲン・ハーバーマスの公共圏論を対象とし，そこにおけるコミュニケーションとメディアの特質を検討することを通じて，両者に見られる「公共論的転回」の思想的意義を明らかにすることを目的にしている。

アーレントが古代ギリシアのポリスをその範とすることや，ハーバーマスが理性的な討議をするブルジョア＝公衆という図式を導入したことから，先行研究では，アーレント公共空間とハーバーマス公共圏は，モダンに対するスタンスの違いという観点から論じられてきた。例えば，アーレント公共空間論はモダンを批判する文脈で参照され，そのプレ・モダン性が強調されるときには，市民的徳を重視するような「共和主義」の系譜にあるとされている［cf. Canovan 1974＝1981: 35; Wolin 2001＝2004: 115］。他方で，そのポスト・モダン的側面が強調されるときには，「差異」の思想の先駆とみなされている［cf. Honig 1995＝2001; Villa 1996＝2004］。

また逆に，モダンを擁護する立場からは，アーレントの非モダン性こそがまさに批判の対象となるが，これについてハーバーマス自身が次のように述べているのは，両者の違いを示すものとして示唆的であろう。「ただわたしは，ハンナ・アーレントを導いている独特なパースペクティヴに，注意を喚起したい。すなわちそれは，諸社会問題を行政的に処理することから免れた国家，社会政策の諸問題から純化された政治，福祉の組織化から独立した公共的自由の制度，社会的抑圧の前では立ちどまる根底的な民主主義的意志形成，といったパースペクティヴである」（訳語一部変更）［Habermas 1971＝1984: 340］。つまりハーバーマスからすれば，社会・経済的なことを「私的」として「公共」から除外するアーレントの思想は，近代以降は有効性をもち得ないというわけである(1)。

だが他方で，アンチ・モダン対モダンという図式を離れて見るならば，アーレント公共空間論とハーバーマス公共圏論は共通点を有してもいる。例えば花田達朗は，ハーバーマスが，「共同性という関係とコミュニケーションという行為」に「公共」の「構成要素」を見る視点を，アーレントから受け継いでいることを強調して

＊早稲田大学大学院社会科学研究科　2006年博士後期課程退学（指導教員　田村正勝）

いる［花田 1996: 27］。モダンに対するスタンスの相違とは裏腹に，両者には「コミュニケーション」もしくは「共同性」に関する共通の視座があることの指摘である[(2)]。

このような状況下，本論は，アーレント公共空間とハーバーマス公共圏における「コミュニケーション」の意味について，コミュニケーションの位相およびコミュニケーション・メディアに着目しつつ検討することで，「公共」（的であること）が，いかなる思想・哲学的含意を有しているのかを考察していく。またそのような作業を通じて，アンチ・モダン対モダンという問題設定とは別次元で，アーレント公共空間論とハーバーマス公共圏論に共通する視座を明らかにしていきたい[(3)]。

1．「意識哲学のパラダイム」におけるコミュニケーション・モデル

アーレントとハーバーマスが「コミュニケーション」に着目することは，両者が単に会話や討論，議論といったもの――つまりは日常言語で言うコミュニケーション――を重視することを必ずしも意味するわけではない。だがもちろん，両者は沈黙から生じる深遠な哲学における真理の探究を肯定しているわけではない[(4)]。アーレントとハーバーマスはともに，「公共」的な関係や共同性を問うことを通じて，「意識哲学のパラダイム」を批判しているのであり［齋藤 1987: 257］，その「意識哲学のパラダイム」と対置されるのが，「公共的」な次元での「コミュニケーション」なのである。

このことを考えるために，まず，哲学・思想史とは無縁にも思える，情報工学におけるコミュニケーション・モデル――シャノン／ウィーバー・モデル――を見てみよう。

クロード・シャノンとウォーレン・ウィーバーが定式化した機械通信におけるコミュニケーション・モデルにおいて，コミュニケーションは，発信者（情報源）が共有されているコードに依拠して回路（チャンネル）にメッセージを送り，受信者がそれを正確に受け取ることで成立するとされている［Shannon & Weaver 1949: 4-6］。そして，このモデルのもとで，コミュニケーションが成立するために最も重要なのは，ノイズを除去することであり，ノイズは二つの次元で想定されている。一つは，まさに回路にノイズが混入すること，もう一つは受信者によるメッセージの誤解である。したがって，このモデルにおいては，回路にノイズが混入することを技術的に制御すること（例えばケーブルの性能の向上）と，可能な限り誤解を防ぐことが目指されることになる。

だが実際には，技術的に完全に回路を制御することも，誤解を完全に防ぐことも不可能であり，ノイズの混入によるコミュニケーション失敗の可能性はつねに存在する。ではコミュニケーションの完全な制御を可能とする条件など，そもそもありえないのであろうか。

ここでこの問いは，機械通信・情報工学を離れて哲学的問題に接近する。そして事実，哲学（正確には形而上学）は，ノイズの混入を完全に防ぐための，一見単純ではあるが決定的な解答を用意した。それは，発信者と受信者の一致である。発信者と受信者との間に，距離が存在しなければ，もはやそこにノイズの混入する余地は存在し得ない。このような意味で，デリダが「自分が話すのを聞く」と表現した形而上学（＝深遠な哲学）の特質は，哲学史上の認識

論的な枠組みにおいてのみ見られるわけではない。情報工学のモデルも十分に“形而上学的”である。つまり，「自分が話すのを聞く」という特質は，認識論的な営為のみならず（あるいは，というよりもむしろ），コミュニケーションが希求される場面で逆説的に見出されるものなのである。

すなわち，コミュニケーションにおいて，回路の透明性と受信者の透過性が同時に求められるとき，究極的には発信者と受信者が完全に一致することが要請される。これは結局，コミュニケーション過程が，発信者の「意識」へと余すことなく回収されること――単独の主体の自己関係――を意味しよう。したがってここには，コミュニケーション・モデルそれ自体に，すでにコミュニケーションを無化する契機が含意されているというパラドクスが存在しており，このことが「意識哲学のパラダイム」を形成するのである。

では，「意識哲学のパラダイム」を批判して，「公共」における「コミュニケーション」を見出すアーレントやハーバーマスの眼目はどこにあるのだろうか。その回答はシンプルであると同時に，「意識哲学のパラダイム」（におけるパラドクス）にすでに含意されている。すなわち，コミュニケーションが「意識」へと転換される二つの契機――透明な回路と透過された受信者――を「意識」へと回収できないものとして見出すということだ。以下では，この点について詳細に検討していこう。

2．「公共」とメディア

セイラ・ベンハビブは，アーレント公共空間とハーバーマス公共圏の相違点を，そこで想定されるコミュニケーション・メディアの違いから検討している。ベンハビブは，ハーバーマス公共圏が「印刷物，ニューズレター，小説，文芸・科学雑誌」といった近代的なメディアと密接に結びついていることを強調し，次のように言っている。

> アーレントの考えでは，公衆は「現われの空間」や「城壁に囲まれた都市」といった地政学的で空間的なメタファーと結びついている。だがハーバーマスは，印刷メディアの勃興とともに，公衆のアイデンティティが変容したことに焦点を当てている。つまり公衆は，読者，作者，解釈者から成るヴァーチャルなコミュニティとなったのである。ハーバーマスにとって，公共圏は……コミュニケーションや情報，意見形成といった非人格的なメディアから成る［Benhabib (2000) 2003: 200］。

このようなベンハビブの指摘は，アーレントが，しばしば古代ギリシアにおける劇場の比喩で公共空間を語っていること［Arendt (1958) 1998: 181ff.］，そしてハーバーマスが活字や印刷物といった近代的なメディアを媒介としながら公共圏が形成されていく過程を詳細に記述したことに対応している［Habermas (1962) 1990 = (1973) 1994］。ベンハビブによれば，劇場の比喩は，アーレント公共空間が，観客と役者が同じ空間に集合することで関係するような場，すなわちメディアを介さない直接的な関係に依存するものであることを示唆し，他方で印刷物というメディアを介した関係は，ハーバーマス公共圏が「非人格的なコミュニケーションに

よって形成される」ことを意味する［Benhabib (2000) 2003: 200］。

このようなベンハビブの見解は興味深いものである一方で，次のような問題を有していると考えられる。第一に，アーレントとハーバーマス双方に通底する「意識哲学のパラダイム」批判を低く見積もっていること。第二に，結局のところベンハビブの見解は，アーレントとハーバーマスが想定するモデルの時代状況の相違——近代以前か近代か——に過度に依存していることである。

だが他方で興味深いのは，ベンハビブが次のようにも言っていることである。「初期啓蒙における読書する公衆としてのブルジョアは，第三の声，つまりは不在の著者の声について論じることで，公共的な事項に関する理性を行使する。ここには，目の（＝視覚的な）公衆から，耳の（＝聴覚的な）公衆への転換がある……」［Benhabib (2000) 2003: 200］。つまりベンハビブは，アーレント公共空間とハーバーマス公共圏の差異に，「目＝視覚」の「公共」か，あるいは「耳＝聴覚」の「公共」か，という違いを見ているのである。

「目」と「耳」の差異。ここで，「目」は見える他者との関係を，「耳」は「第三」の存在，すなわちその場には居合わせない「不在」の他者との関係を連想させるだろう。例えば，沈黙していても，視線が相互に向けられることで，そこに何らかの関係が構築されることは可能であるし，期せずしてその関係に巻き込まれてしまうこともある。「目」を介した「視覚的」な関係はこのようなことを示唆するだろう。

他方で「耳」は，眼前の関係性を超えたコミュニケーション——「第三の声」との関係——を示唆するのみならず，それが誰かの語りかけという主体的・能動的行為を端緒とすることを意味するだろう。語りかけがなければ，「耳」が作動する必要はない。ベンハビブは，このようなことを想定して，「目」と「耳」という表現を用いている。だがしかし，「目（視覚）」と「耳（聴覚）」によって，アーレント公共空間とハーバーマス公共圏を特徴づけることは妥当なことなのだろうか。

先のベンハビブの引用に戻ろう。ベンハビブが言う「第三の声」は，あくまで「書かれたもの」の「著者」を示している。したがって「文字＝エクリチュール」という媒体＝メディアがなければ，そもそも「第三の声」の存在が問題化されることはない。また（ベンハビブも指摘しているように），ハーバーマス公共圏の原型は作者不在の「書かれたもの」（＝エクリチュール）を読む諸個人，すなわち「読書する公衆」であり，ハーバーマスはこの点に関して次のように言っている。「……つぎつぎと新たに出版されるものを読む習慣を身につけた人びとが，とりわけ都市部やその他の地域の市民層のなかから……，普遍的な読書する公衆をかたちづくった。それとともに，いわば私的領域のただなかから外部に出た，相当きめの細かい網の目をもった公共的なコミュニケーションも出現する」［Habermas (1962) 1990＝(1973) 1994: iv］。

他方でアーレント公共空間は，先述のように「劇場」をモデルにしたものである。アーレントは，その特質について，「劇場に由来する政治的なメタファーの多くに内在する重要な意味は，ラテン語のペルソナという語の歴史に端的に示されている」と言い，ペルソナの機能と

して「俳優自身の顔や表情を隠したり，……取り替えたりする」ことと，それを通して「声を響かせること」を挙げている［Arendt (1963) 1990: 106］。

このような意味で，ペルソナの存在は，相手の顔を見ることを禁じる，つまりは視線がダイレクトに相手の顔へと到達することを禁じると同時に，遮断された視覚とは別に「声」というメディアを通じて関係性が構築されることを暗に示しているのである。そして「声を響かせること」がアーレントにおいて重要なのは，アーレントが「言論－行為（speech-act)」において，「人間のユニークネス」が「現われ」るとみなしているからである［Arendt (1958) 1998: 5chap.］。

したがって，アーレント公共空間は「目」によるコミュニケーションというよりも「話す／聞く」関係であり，他方でハーバーマス公共圏は「耳」によるコミュニケーションというよりも，「書く／読む」関係であると考えることができよう。つまり，アーレントは「声」をメディアとして「話す／聞く」というコミュニケーションを，ハーバーマスは「文字＝エクリチュール」をメディアとした「書く／読む」コミュニケーションを，「公共」と連動するとみなしているのである。

だが，このことはアーレント公共空間とハーバーマス公共圏に，全く異なるモチーフが存在することを意味しない。むしろ，「意識哲学のパラダイム」を批判するために，単独の主体（の意識）に還元できないようなメディアと他者を措定するという，両者に共通する視座――「公共」への視座――が違う形態で表現されたものである。以下では，この点を詳細に検討しよう。

3．公共論的転回（1）：アーレント公共空間と「話す／聞く」

アーレント公共空間を，「目（視覚)」によって特徴づけるベンハビブの見解は，アーレントにフッサール現象学の強い影響を見ることと連動している［cf. Benhabib (2000) 2003: 95］。確かにアーレントは，現象学における相互主観性を彷彿させるかのように，公共空間の生成条件として「無数のパースペクティヴとアスペクトが同時に存在すること」を挙げて，次のように言っている。

> 事物が，そのアイデンティティを変えることなく多様な相貌において見られ，それゆえに事物の周りに集まった人々が，同一のものを全く多様に見ていることを知っている場合にのみ，世界のリアリティは偽りなく確実なものとして現われる［Arendt (1958) 1998: 57］。

アーレントは，この引用に限らず，公共空間の生成条件として「ものの見え方」の「複数性」が確保されなければならないことを繰り返し語っている。だが他方でアーレントは，この「無数のパースペクティヴとアスペクト」という認識論的な枠組みを直ちに「公共」と結びつけてはいない。

フッサール現象学では，パースペクティヴやアスペクトの相違は，「わたし」という基点の空間的な移動に還元される。すなわち，それは「もしわたしがそこにいってそこに身をおいたならば，わたしもおそらく同様にもつであろう

ような空間的な現われ方をもつもの……」である［Husserl 1950＝1980; 306］。したがって，違う位置から同じ事象を「見ている」他我は，「わたし」が移動したらもつことが予想されるパースペクティヴを有しているという意味で，「わたし」の変容体となる。

他方でアーレントにおいては，パースペクティヴやアスペクトの相違は，「言論－行為」，つまりは「話す」ことで公開されてはじめて意味をもつ。つまりは，公共を形づくるパースペクティヴやアスペクトの「複数性」は，単に可能性もしくは潜在的なものとして確保されるべきではなく，「言論－行為」において公開されなければならない［Arendt (1958) 1998: 175ff.］。「公共に現われるものは全て，万人によって見られ，聞かれ得るし，可能な限り広く公開される……」［Arendt (1958) 1998: 50］。

たが注意すべきなのは，この「公開」は「共有」とは結びつかないということである。アーレントは次のように言っている。

> その人がwhatであるのか――その人が見せたり隠したりする性質，天分，才能，欠点――とは反対に，whoは，その人が言うことや行うことの全てに暗示的に暴露される。……だが，その暴露は，意図された目的として達成されることは，ほとんど不可能である。……それどころか確実なのは，これほど明白に間違いなく現われるwhoは，ギリシア正教のダイモンのように，その人自身には隠蔽されたままであるということである……［Arendt (1958) 1998: 179］。

公共空間における「言論－行為」において公開されるのは，その人がwhoであるのか，すなわちそのユニークなパースペクティヴやアスペクトである。だがしかし，その公開は，パースペクティヴやアスペクトを他人と共有することで，相互的な関係性――相互主観性――を構築することを意味しない。むしろ，「その人」（＝わたし）が公開するユニークなパースペクティヴやアスペクトは，他者にのみ「現われ」る，つまりは聞きとられる。このような，「その人」と他者の非対称的な関係の無限の広がり（＝公開）こそが公共空間を形づくるのである。

すなわち，「その人」は自身を「言論－行為」において自由に公開する。つまりは，自由に「話す」。だがしかし，それが他者にどのように受け取られた（＝聞かれたのか）のかも，あるいはそもそも受け取られたのか（＝聞かれたのか）どうかさえ知ることはできない。「その暴露は，意図された目的として達成されることは，ほとんど不可能である」。つまり，「その人」のユニークなパースペクティヴもしくはアスペクトを，「その人」自身が回収することは不可能なのであり，このような単独の主体への回収不可能性こそが，「公共」の条件となっているのだ。

したがって，「その人」は，公共空間において他者の「同意を強制すること」はできず，「人は他者の同意を，せがんで乞い求めることができるだけ」ということになる［Arendt 1982: 72］。先述の劇場の比喩で言えば，「その人」は「仮面を通して声を響かせる」ことはできるが，その「声」を回収することはできない。「自分が話すのを聞く」ことは徹底的に禁じられているのである(5)。

このような意味で，「その人」と他者の「間」

には「断絶」が存在し，「その人」と他者は（たとえ劇場という同じ場所に居合わせたとしても），乗り越え難い「間」（between, interval）を創出しつつ関係するのである［cf. Arendt (1963) 1993: 3ff.］。アーレントは，この「間」が無化して「その人」と他者が直接関係することを「公共」の喪失とみなしている［Arendt (1958) 1998: 38ff.］。

梅木達朗は，このようなアーレントの視座を「公共論的転回」と表現している［梅木 2002: 89］(6)。フッサール現象学は，他我や他人のパースペクティヴやアスペクトを，自身の空間的な移動として自我に回収すると同時に，自我のパースペクティヴもしくはアスペクトを，反省によって回収することで自己同一性を確かなものとする。またシャノン／ウィーバー・モデルにおいても重要なのは，発信者の発する情報，すなわち意図もしくは意志が，正確に受信者に到達することであるゆえに，発信者と受信者の一致がその理想となる。これと相違してアーレントにおいては，公開は公共空間の可能性の条件であるが，「話す／聞く」関係に非対称性もしくは交換不可能性が想定される。このことによって，自己同一性や自己意識に回収されないような「空－間」（space）が，「話す／聞く」の「間」に見出されることになるのだ(7)。

したがって，アーレントにおいて「声」は，「話す／聞く」関係を〈話し手＝発信者〉の意識（ないしは意図）に回収することを不可能にすると同時に，そこに回収できないような他者（〈聞き手＝受信者〉）を措定するような役割を担っているということになる。また逆に，このようなメディアを媒介とした「話す／聞く」関係こそが，〈聞き手＝受信者〉を単独の主体の意識には回収できない「他者」とするのである。このような意味で，アーレントにおいては，単独の主体のパースペクティヴやアスペクトという設定がそもそも意味をなさない。非対称的な「言論－行為」の空間，すなわち「話す／聞く」の交換不可能性こそが「公共」の条件なのであり，「声」はまさにそのことを象徴するメディアなのである。

4．公共論的転回（2）：ハーバーマス公共圏と「書く／読む」

以上見てきたように，アーレント公共空間が「声」をメディアとした「話す／聞く」関係であるとすれば，むしろハーバーマス公共圏は「書く／読む」という関係を前提としたものである。ハーバーマスもアーレントと同様に公開を重視するが，それは「話す／聞く」関係において示されるものではなく，あくまで書かれること，そしてそれが読まれることを前提としている。ハーバーマスは，「市民的公共性の成立史」において，新たに流通するようになった新聞というメディアとともに，「公共」が立ち現われてくることを詳細に検討し，次のように言っている。

> 行官庁はその公示を「公衆」に宛てて発表する。したがってそれは原理上は，すべての臣民に宛てられるのである。けれども普通は，これらの公示はこの方法では，「一般人」にではなく，せいぜい「教養ある身分」にしか届かない。近代国家の装置と一緒に，「ブルジョア」（die Bürgerlichen）という新しい層が成立し，これが「公衆」の中で中心的な位置を占める。……［原文改行］……この

ブルジョアの層こそは，公衆の真の担い手であり，これは始めから読書する公衆なのである［Habermas（1962）1990＝（1973）1994: 34-35］。

ベンハビブが「耳（聴覚的）」に着目したこととは裏腹に，ハーバーマス公共圏における公衆は，むしろ「読書する公衆」である。ただし，それはこの時点ではまだ，公権力が「社会を特殊な意味における公共問題にするために利用していた道具――新聞」を「読む」ような公衆にすぎない［Habermas（1962）1990＝（1973）1994: 36］。だが「読書する公衆」は，「新聞」の「機能替え」をすることで，公権力の「挑戦」に応じるようになる。つまりは，公権力の公示として機能していた新聞が政治新聞となることで，新聞が形成する領域が（公権力にとっての）「批判的な危険地帯」となっていったのである。

「しかるにいまやこれは，公権力から分離したひとつの民衆広場となり，ここで公衆として集合した民間人が公権力を公論の前に引き出してその正当性の証を求めるようになるのである」。ここで「臣民は主体となり，政府の下知の受け手は，政府との契約の当事者となる」［Habermas（1962）1990＝（1973）1994: 37］。さらに，「手書き新聞」が印刷メディアとなって一層広範囲に普及するにつれて，公共圏は普遍的な公開性を獲得していくようになる。このようにハーバーマスは，アーレントと相違して，新聞（文字＝エクリチュール）というメディアを介した「書く／読む」関係を想定しており，その関係のうちでの公開を重視した。

そしてここで興味深いのは，ハーバーマスが基本的には「書く／読む」関係を前提としつつも，あくまで「読む」ことに饒舌なことである。このことは，ハーバーマスが「民間ジャーナリズム」が発展する以前，すなわち新聞が公権力の公示の手段であった時点を，公共圏および公衆生成の端緒とする先の引用にも示されているだろう。つまりハーバーマスにおいて，より重要なのは「読み手」，すなわち「読書する公衆」なのである。公権力から民間へと，〈書き手（＝発信者）〉は変化しても，あるいは新聞が「手書き」から印刷メディアへと変化しても，〈読み手〉はつねにすでに「読書する公衆」である。まず「読む」ことが契機となり，それが例えばコーヒーハウスでの議論へと繋がっていく。

だが，このことは，〈読み手＝受信者〉が〈書き手＝発信者〉に対して優位に立っていることを意味しない。〈読み手＝受信者〉は，あくまで「書く／読む」関係において〈読み手＝受信者〉であるにすぎず，その関係を前提としない〈読み手＝受信者〉などはあり得ない。このような意味で，結局のところ〈読み手＝受信者〉は，時間的には先行する〈書き手＝発信者〉との関係，すなわち「書く／読む」関係における役割にすぎないとも言える。また逆に，時間的に先行する〈書き手＝発信者〉は，〈読み手＝受信者〉の「読む＝受信」という営為をまってはじめて，〈書き手＝発信者〉としての地位を獲得する。このような意味で，「書く／読む」関係においては，時間的に先行する〈書き手＝発信者〉と，その存在論的な条件である〈読み手＝受信者〉は，非対称な共同性を構築するのである。

すなわち，エクリチュールに〈書き手＝発信者〉がないことはないが，〈読み手＝受信者〉

をもたないことはあり得る。逆に〈読み手＝受信者〉は，不在の〈書き手＝発信者〉，すなわち（第三の声）とつねに対峙しなければならない。このような意味で，〈読み手＝受信者〉と〈書き手＝発信者〉は，相互にとってその意識のうちに回収できない他者となっており，この設定を可能とするのが，「書く／読む」の「間」に介在する「文字＝エクリチュール」というメディアなのである。

アーレントにおける「話す／聞く」関係と同様，ハーバーマスにおける「書く／読む」関係にも，単独の主体の意識に還元されないような非対称的な関係が設定されており，ここにハーバーマスにおける「公共論的転回」を見出すことができるだろう。ハーバーマス公共圏においても，禁じられているのは「自分が話すのを聞く」ことなのである。したがって，「文字＝エクリチュール」というメディアも，「書く／読む」というメタファーで表現されるような関係も，全てが「意識哲学のパラダイム」を批判すべく用意されたものであると考えられる。

5．公共論への批判

以上これまで，アーレントとハーバーマスにおける「公共論的転回」の意義を，「意識哲学のパラダイム」批判という観点から考察してきた。両者は，単独の主体（の意識）には回収されないような公共的で開かれた関係を模索していると言える。だが他方で，「公共」という言葉とは裏腹に，アーレント公共空間とハーバーマス公共圏には，ともに閉鎖的な性格があるとして度々批判されてもいる。

周知のように，アーレント公共空間が古代ギリシアのポリスを範としたことや，アーレントが「必要＝必然性」（necessity）を公共から除外したことから［cf. Arendt (1963) 1990: 2chap.］，アーレント公共空間における排除の問題，すなわちそのエリーティズムは度々指摘されてきた。アーレントは，「必要＝必然」の領域だけを担う集団――奴隷――を自明視することで，公共空間を「必要＝必然性」から解放された領域として純化している，というように。

例えば古茂田宏は，アーレントには，生活上の関心から「必要＝必然性」を問題とする「『貧者』や『弱者』への同情を切り捨てなければならぬとする貴族主義が牢固としてある」と言っている［古茂田 2003: 33］。このような批判は，「必要＝必然性」すなわち経済問題を公共から放逐するアーレントの理想主義的側面に向けられたものであり，近代以降の時代状況にはアーレント公共空間は馴染まないという，先に見たハーバーマスのアーレント批判――モダンからアンチ・モダンへの批判――と重なるものでもあろう。

ただし，ハーバーマスが想定する公共圏にもある種の排除があり，それが閉鎖的な領域である（もしくは，あった）可能性も度々指摘されてきたことでもある。例えば，ナンシー・フレイザーは，ハーバーマスの公共圏が正確にはブルジョア公共圏であることを強調し，ハーバーマスがブルジョア以外の公共圏を考察の対象としなかった点と，そのためにブルジョア公共圏を理想化したという問題点があることを指摘している［Fraser 1992＝1999: 126］。

ハーバーマスは，このフレイザーの批判に間接的に回答しており，『公共性の構造転換』の新版に書き加えられた「一九九〇年新版への序言」で，ブルジョア公共圏以外の公共圏につい

て，旧版の「序言でふれていたが，本論では取り扱っていなかった」言い，ブルジョア公共圏以外の公共圏が存在する（した）可能性を認めている［Habermas (1962) 1990＝(1973) 1994: vi］。

だが，このような批判とは別に，デリダの強い影響のもと，ペーター・スローターダイクがハーバーマス公共圏における「読書する公衆」と「文字＝エクリチュール」というメディアそれ自体がつくる閉鎖性に言及しているのは興味深い。スローターダイクは，活字メディアを介した（政治的）関係に，「書事（エクリチュール）を媒体（メディア）とした友愛を創設する遠隔情報伝達（テレコミュニケーション）」としての「人文主義」的な伝統を見て，次のように言っている。

> ……人文主義がプラグマティックからプログラム的になったところでは，文芸的な社交のモデルが政治的社会の規範へと拡大する。そこから，各国の国民的空間において拘束力を持つカノンに対して誓いを立てる，完全に識字化された強制的友愛組合としての民族が組織されてきたのである。……近代的国民というものは，同一のエクリチュールを通じて同じ見解を持つ友人たちの同盟と化した「読書する公衆」という効果的なフィクションでなくて何であろうか？［Sloterdijk 1999＝2000: 28-29］

スローターダイクは，プラントンからハーバーマスにいたるまでの西洋的教養において，活字メディアが果たした役割に着目している。それは，文字を読解できる者／できない者，さらには文字の背後にある作者の意図を理解できる教養のある者／ない者，の間に境界線を引くことであり，スローターダイクは，その境界線の内側を「人間園」と表現している。「エクリチュール文化は，自らの宿主社会に深い裂け目を入れ，識字者と非識字者の間に，その間の架橋のしがたさはほとんど種差と言っていいほどの溝を掘ったのである」［Sloterdijk 1999＝2000: 69］。このような意味で，エクリチュールには「人文主義の根底に横たわっているコミュニタリズム（共同体主義）」的なエートスが刻印されているが，その「幻想共同体」は「読む能力を持つものとして選ばれた人々の運命的な連帯という夢想」であると言う［Sloterdijk 1999＝2000: 27］。

スローターダイクのこのような見解は，ハイデガーの『ヒューマニズム書簡』への応答という形式をとってはいるが，暗に批判の対象とされているのは，ハーバーマスに代表されるドイツの「啓蒙的＝批判的知識人」である[(8)]。スローターダイクは，エクリチュールをメディアとする「人文主義」的な伝統に依拠する，ハーバーマス（に代表されるドイツ知識人）の戦略が，電子メディアの時代ではもはや通用せず，したがって「人文主義・教養主義」的な伝統が終焉しつつあることを宣言する。

「まるでもう引き取りにきてもらえない局留の手紙のように，静かな本棚に佇んでいるのが，エクリチュールの運命だ。それらは，もはや現代人には信じることができない……」［Sloterdijk 1999＝2000: 82］。作者不明の不特定の情報が電子メディアを通じて自由に行き来する現代では，エクリチュールは以前のように「教養」を前提とした閉鎖的・特権的な共同体

――「人間園」――を形成することはできない，というわけである［cf. 仲正 2001: 74-76］。

ここでスローターダイクが批判しているのは，もちろんハーバーマスであってアーレントではない，だが，その批判のスタイルに注目してみよう。スローターダイクは，「公共」の条件となるメディアとそこから派生する関係性それ自体が，公共を閉鎖的なものとする可能性を指摘しているのである。以下では，この点について詳細に検討しよう。

6．公共論的転回再考

本論の文脈から見て，スローターダイクの人文主義批判で興味深いのは，スローターダイクが〈書き手＝発信者〉と〈読み手＝受信者〉に非対称性を認めたうえで，その非対称的な関係性それ自体が，「書く／読む」関係の閉鎖性を準備する筋道を示している点である。

まずスローターダイクは，エクリチュールというメディアの特性ゆえに，〈書き手＝発信者〉が〈聞き手＝受信者〉を制御できないことを認める。「差出人が実際の受取人を予期できない，というのもエクリチュール文化のゲームの規則である」［Sloterdijk 1999＝2000: 24］。エクリチュールには誤解がつきものであり，したがって〈書き手＝発信者〉と〈読み手＝受信者〉，すなわち「書く／読む」関係は失敗する可能性につねにすでに晒されている。このような意味で，「書く／読む」関係は，当初から回路の透明性と他者の透過性を求める情報工学もしくは形而上学的な発想とは確かに異なるものである。

だがスローターダイクは，その「書く／読む」関係の非対称性こそが，〈書き手＝発信者〉と〈聞き手＝受信者〉を媒介するような「仲介者」を要請すると主張する。「……一九四五年までの期間は，読むことを愛するナショナルな人文主義の最盛期だった。その中心にあって権力意識を持ち，自己満足気に居座っていたのは，新旧の文献学者たちのカーストだった。彼らは，子孫たちに，重要な分厚い手紙の受取人のサークルに入るためのイニシエーションを授ける使命を委託されていたのである」［Sloterdijk 1999＝2000: 30］。

この「仲介者」は，「エクリチュールの送り手とされる著者たちについての特権化された知識」を有する「教師」や「文献学者」と表現されている［Sloterdijk 1999＝2000: 30］。つまり，彼らが「書く」と「読む」の「間」に入ることで，〈読み手＝受信者〉は誤解することなく，〈書き手＝発信者〉の意図を理解することができる（かのようになる）し，また逆にそのことが，彼ら「仲介者」に権威を付与するというわけである。

つまり，ここでスローターダイクは，ハーバーマス公共圏が依拠する「書く／読む」関係が，〈読み手＝受信者〉を特定できないというエクリチュールの特性にもかかわらず（より正確には，その特性ゆえに），結果的に閉鎖系を形成してしまうという逆説的なプロセスを問題としている。そして，この逆接こそが「人文主義」の伝統を形づくってきたと同時に，その閉鎖系の内部――「人間園」――の“人間”に，ある種の免罪符を与えてもきたのだろう。閉鎖性はあくまで結果にすぎない，というように。

そして，スローターダイクによるこのような指摘は，より広くコミュニケーションの問題と結びつくだろう。つまり，それは「文字＝エク

リチュール」をメディアとするコミュニケーション（=「書く／読む」関係）のみならず，コミュニケーション一般の問題と関係せざるを得ない。「宛先のない」「誤解される」「受取人を予期できない」……といったことは活字メディアのみの特徴ではない。むしろ，「書く／読む」にせよ「話す／聞く」にせよ，発信者と受信者の関係に非対称性が想定されたときに見出されるものなのである。

ここで，スローターダイクが言う「仲介者」がなぜ特権性をもつのかを考えてみよう。「仲介者」は，断絶した発信者と受信者を文字通り仲介する機能において特権性を有していた。「彼らは，子孫たちに，重要な分厚い手紙の受取人のサークルに入るためのイニシエーションを授ける使命を委託されていたのである」。だがしかし，注意すべきなのは，「仲介者」の権威は，「仲介者」自身に内在するものではなく，発信者と受信者の断絶を埋めるという所作においてはじめて見出されるということだ。

すなわち，受信者が発信者の意図を正確に受け止めた（とされる）地点から，事後的に発信者が見出されるとき，「仲介者」の「著者たちについての特権化された知識」はつねにすでに，発信者と受信者の断絶をうめる「知識」となる。だが，その「特権化された知識」は，あくまでも受信者が発信者の意図を正確に理解した（はずだ）という事後的な認識に支えられるものであり，「仲介者」の「特権化された知識」それ自体が直ちに受信者と発信者の断絶をうめるわけではない。「声」をメディアとした「話す／聞く」であれ，「文字」をメディアとした「書く／読む」関係であれ（さらには電子メディアであれ），受信者へと到達した時点から発信者へと遡行することが，発信者から受信者への回路を直線的で透明なものとして（再）構築する。つまり，「書く／読む」関係が閉鎖的になるのは，「仲介者」の「知識」が特権的になるのと同時なのである。

だが他方で，これとは逆に，「書く／読む」もしくは「話す／聞く」関係を事前から見ると，ノイズの混入をあらかじめ制御するために，「自分が話すのを聞く」こと，すなわち発信者と受信者の一致が目指されることになる。すなわち発信者は，「予想できない」受信者ではなく，予想・予期できる相手を想定して「声」や「文字」を発信する。逆に言えば，予想・予期できる相手だけを受信者として選別するのである。そして，最もよく予想・予期できるのは当然にも，発信者自身であろう。この場面において，「話す／聞く」「書く／読む」といった公共的な「コミュニケーション＝関係」もまた「自分が話すのを聞く」関係へと転化するのである。

したがって，「後」からの遡行と，「前」からの予期はいずれも，「話す」と「聞く」，「書く」と「読む」の（それぞれの）「間」の断絶をうめることで，閉鎖系を形づくると言える。そしてこの地点で，回路へのアクセスの問題が生じ，先述のようなハーバーマスやアーレントへの批判，すなわち排除の問題がクローズアップされることになるのだ。つまりアクセスの問題は，遡行と予期によって（はじめて）生じるものであり，したがって逆に言えば，それは遡行と予期による閉鎖系の完成を暗に前提にもしている。

スーザン・ビックフォードは，アーレントの「話す／聞く」関係を考察する過程で次のよう

に言っている。「しかし，コミュニティが『含意され』，コミュニケーションが『予期』されると，これらの他者は，その場に文字通り現前する必要はない」[Bickford 1996: 82]。

公共論的転回によって「意識哲学のパラダイム」を批判しているハーバーマス公共圏論もアーレント公共空間論も，それが事前と事後，あるいは先と後という時間＝時制（temps）においてとらえられるとき，その「公共」的な性質は無効化する。そして，この地点から両者の「公共」論を見れば，そこへのアクセス可能性が制限されていること，すなわち排除が問題化されることになる。つまりここで，「書く／読む」関係と「話す／聞く」関係がともに，批判の対象となるのだ。

したがって，アーレントとハーバーマスにおける公共論的転回は，予期－遡行という時間軸それ自体を批判しているものとみなされるべきだろう。あるいは逆に，両者に見られる公共論的転回の意義は，予期－遡行という時間軸を逸脱していることのうちにあるのではなかろうか。アーレントが「すでにない＝過去」と「いまだない＝未来」の「ギャップ（裂け目）」に，「人間」が位置すると言っていることは偶然ではないだろう［Arendt (1961) 1993 10ff.］。アーレント公共空間とハーバーマス公共圏における公共論的転回は，事前と事後に定位した“認識”に対する挑戦なのではなかろうか。アーレント公共空間もハーバーマス公共圏も“認識”の対象ではないのであり，逆に，認識の対象となった瞬間に，「意識哲学のパラダイム」に転化するのだろう。

むすびにかえて

以上，本論は，アーレントの公共空間とハーバーマスの公共圏を，コミュニケーションとメディアの特質に着目しつつ比較・検討してきた。その過程で，前者が「声」をメディアする「話す／聞く」関係，後者が「文字＝エクリチュール」をメディアとする「書く／読む」関係を想定するという違いがあるにもかかわらず，両者ともに「意識哲学のパラダイム」を批判する視座――公共論的転回――を有していることを明らかにしてきた。

さらに本論は，アーレント公共空間とハーバーマス公共圏の閉鎖性の問題を，スローターダイクによるハーバーマス批判をふまえて検討してきた。そこで明らかになったのは，そのような問題は，両者が見出す「公共」的な関係――公共論的転回――が遡行と予期，すなわち事後と事前という時間＝時制においてとらえられることに起因する，ということである。

したがって，事前や事後という認識論的な設定とは他なる時間＝時制との関係において，公共論的転回という視座を，より詳細に検討するべきであると思われるが，それについては別の機会に譲りたい。

〔投稿受理日2007.5.26／掲載決定日2007.6.12〕

注

(1) ただしハーバーマス自身は，「コミュニケーションによって生み出され，共同の確信がおびている権力」を志向している点において，アーレントを評価していることを明言している［Habermas 1971＝1984: 328］。

(2) もっともアーレントは，ハーバーマスのように，普遍的なコミュニケーション理性を想定してはいない。この点については，仲正（2003）を参照の

こと。

(3) それがモデルにした時代も，著書が刊行された時期も，アーレント公共空間論は，ハーバーマス公共圏論に先行している。だが興味深いことに，日本では，70年代の市民・住民運動との関わりから，まずハーバーマスの公共圏論が積極的に受容された。だが近年では，ハーバーマス公共圏を受容しつつ描かれた市民像が一枚岩的であったことが反省され，「複数性」といったキーワードとともにアーレントの公共空間論が受容されている。この点については，権（2006）で詳細に論じた。

(4) ここでの「深遠な哲学」とは，リチャード・ローティが「視覚メタファー」と表現した，伝統哲学の「表象図式」を想定している［Rorty 1979＝1993］。アーレントもハーバーマスも，ローティが言う「言語論的転回」や「解釈学的転回」といったパラダイムの延長線上で，伝統哲学の「表象図式」を批判しているとみなすことはできるだろう。

(5) したがって，アーレントにおける「声」は，デリダが「自分が話すのを聞く」ためのメディアとして特徴づけた「声」とは違った機能をもつものとみなされるべきであろう。むしろ，アーレントにおける「声」は，後述するように「自分が話すのを聞く」ことを不可能にするようなメディアである。

(6) より詳しく引用しよう。梅木は「公共論的転回」の意義について次のように言っている。「他者の存在から出発して人間を考察しようとする限りにおいて，公共性の思考は，自己現前としてとらえられた『主体』の思考とは異質の議論を提供することができる。つまりそれは自己中心的な『主体』の脱構築に通じているのである［梅木 2002: 89］。

(7) フッサール現象学の相互主観性もしくは間主観性と，アーレントにおける公共空間の相違については，古賀（2001），権（2005）を参照。

(8) スローターダイクの『「人間園」の規則』に端を発する論争については，訳者の仲正昌樹による解説［仲正 2000］，および，仲正（2001）に詳しい。

参考文献

Arendt Hannah (1958) 1998, *The Human Condition*, 2nd ed., The University of Chicago Press.

——, (1961) 1993, *Between Past and Future*, Penguin Books.

——, (1963) 1990, *On Revolution*, Penguin Books.

——, 1982, Beiner, R. ed., *Lectures on Kant's Political Philosophy*, The University of Chicago Press.

Benhabib, Seyla, (2000) 2003, *The Reluctant Modernism of Hannah Arendt*, New ed., Rowman & Littlefield.

Bickford, Susan, 1996, *The Dissonance of Democracy*, Cornell University Press.

Canovan, Margaret, 1974, *The Political Thought of Hannah Arendt*, J. M. Dent & Sons.（＝1981，寺島俊穂訳『ハンナ・アレントの政治思想』未来社。）

Fraser, Nancy, 1992, "Rethinking the Public Sphere", in Calhoun, C. ed., *Habermas and the Public Sphere*, MIT Press.（＝1999，新田滋，山本啓訳「公共圏の再考」『ハーバマスと公共圏』未来社。）

権　安理，2005，「公共空間は，なぜ，いかなる空間なのか——ハンナ・アーレントにおける公共空間をめぐって」，仲正昌樹編『ポスト近代の公共空間』御茶の水書房。

——，2006，「ハンナ・アーレントとポスト・ハーバーマス的公共論——社会学におけるアーレント公共空間論の受容をめぐって」『ソシオサイエンス』vol. 12. 早稲田大学大学院社会科学研究科。

Habermas, Jürgen, (1962) 1990, *Strukturwandel der Öffentlichkeit: mit einem Vorwort zur Neuauflage*, Suhrkamp.（＝(1973) 1994，細谷貞雄・山田正行訳『公共性の構造転換』第二版，未来社。）

——, 1971, *Philosophisch-Politische Profile*, Suhrkamp.（＝1984，小牧　治・村上隆夫訳『哲学的・政治的プロフィール（上）』未来社。）

花田達朗，1996，『公共圏という名の社会空間』木鐸社。

Honig, Bonnie, 1995, "Toward an Agonistic Feminism", in Honig, B. ed., *Feminist Interpretations of Hannah Arendt*. Pennsylvania State University Press.（＝2001，岡野八代，志水紀代子訳「アゴニスティック・フェミニズムに向かって」『ハンナ・アーレントとフェミニズム』未来社。）

Husserl, Edmund, 1950, *Cartesianische Meditationen: eine Einleitung. in die Phänomenologie, Husserliana Bd. I.*（＝1980，船橋弘訳「デカルト的省察」『世界の名著62　ブレンダーノ，フッサール』中央公論社。）

古賀　徹，2001，『超越論的虚構』情況出版。

古茂田宏，2003，「ハンナ・アーレントの革命論」，吉田傑俊ほか編『アーレントとマルクス』大月書

店。
仲正昌樹, 2000,「『スローターダイク論争』とドイツのポスト・モダン」, P・スローターダイク, 仲正昌樹訳『「人間園」の規則』御茶の水書房。
——, 2001,『〈法〉と〈法外なもの〉』御茶の水書房。
——, 2003,『「不自由」論』ちくま新書。
Rorty, Richard, 1979. *Philosophy and the Mirror of Nature*, Princeton University Press.（=1993, 野啓一監訳『哲学と自然の鏡』産業図書。）
齋藤純一, 1987,「政治的公共性の再生をめぐって——アーレントとハーバーマス——」, 藤原保信ほか編『ハーバーマスと現代』新評論。
Shannon, Claude E. & Weaver, Warren, 1949, *The Mathematical Theory of Communication*, The University of Illinois Press.
Sloterdijk, Peter, 1999, *Regeln für den Menschenpark*, Suhrkamp.（=2000, 仲正昌樹訳『人間園の規則』御茶の水書房。）
梅木達郎, 2002,『脱構築と公共性』松籟社。
Villa, Dana R., 1996, *Arendt and Heidegger*, Princeton University Press.（=2004, 青木隆嘉訳『アレントとハイデガー』法政大学出版局。）
Wolin, Richard, 2001, *Heidegger's Children*, Princeton University Press.（=2004, 木田元ほか訳『ハイデガーの子どもたち』新書館。）